【新たな人材の育成に向けて】

Ｄさん：　農業を始めたきっかけですが、私は非農家の出身です。サラリーマンの家庭で育ち、ある時に栃木県の牧場に友達に連れて行かれ、そこで初めて農業というものを知りました。そこのオーナーに憧れたのがきっかけで始まりました。本山町に入ったのは、今から１２年前です。それから経営を重視した営農をしております。

本山で就農したのはなぜかというと、やはり高知県の場合は、冬春が野菜栽培ではメインであり、夏に特化した野菜をすればいいんではないかという単純な発想で、素人ながら、じゃあ、山へ行けばいいやと。嶺北がなぜ良かったのかといったら、道と電気と水と、それからアクセスです。標高の高い山に上がるには、道が地道であったり、私道であったりだとかしていますので、公道があり、山の上まで電気があるということが条件でした。山の上だと当然、水が少ないので、水が年中確保できる所という３つがキーワードでした。プラス家だとかお金だか、そういうものは後からついてきたという感じです。

今現在は、常勤が２名とパートさんが５名で、シシトウとトマトを、夏作を中心にやっています。現在は、平野部の農家さんとも連携をして、周年出荷体制を整えています。これが今、３期目になります。この標高を違えることによって、周年の出荷ができるということは、高知県内だけで完結する形としてはなかなか珍しいのではないかなと思います。

企業との連携ということなんですけど、基本的に、自分は農家になりたかったというのがありますので、どういうものが市場性としてあるのかというものを持ってなかったため、まず農地を取得する前にどういうものを作ればいいかというところから入りました。その当時でしたら、トマトがブームでしたのでトマトから入っていきました。現在はトマトとシシトウがメインで、あとは作業受託だとか畑、田んぼも少々やっています。

今後の展開とかを含めて、私がお願いしたいのは１点だけです。このクラブの法人さんのほとんどが、人材不足にずっと慢性的に悩まされていると思います。外国人研修生や実習生ということで対処されている農家さんもいますけど、やはりこのへんは、できれば日本人を受け入れて育てたほうが、空洞化を免れるのではないかなという、理想を言えばそこです。やはり、農業法人経営とか大規模になると経営を継続しないといけない。または右肩上がりにしていくため、当然そういう対処をされているというところもあると思います。

なぜ、そこに日本人が入ればいいのかということですけど、暖簾分けという形です。私の住んでいる嶺北地域では、有機農業を中心にいろんな方が参入してきていますが、就農後、独立されてもまずほとんどの方がご飯が食べられていない状態です。やる気はあるんですけど、なかなか経営とのバランスがとれていない。

先月もＩ・Ｕターンの形で嶺北にいらしていた４、５名の新規就農者とお話することがあったのですが、皆、仕事の仕方がわかっていない。非効率であったり、仕事の取り組み方がちょっとずれている部分があるんじゃないかなと非常に感じています。ただ、農業が好きならそれでかまわないと思いますが、せっかく高知県というへき地、またそのへき地である嶺北に住んでいる人達を見ていて、果たしてこの人達はずっとこのままここの地域にいてくれるのであろうかというのは非常に心配なところです。この人達を救うことはできないかもしれませんけど、これから志望して来る人達に、当クラブが協力できる、または手を差し伸べることができないものかと思います。

暖簾分けは、師匠についておくということは、もちろん農業の技術だとか知識だとかというのは手に入るけど、そこに販売のチャンネルがあるというのは、非常に大きなものです。

ブランド化という言葉が、今日よく出てきたんですけど、私のブランド化っていう解釈は信用だと思うんです。信用を継続して、その取引年数が長ければ長いほど、そのブランド化が確立できているという解釈です。その師匠が既に持っている販売先、チャンネルを使うことによって、そのブランドも吸収できるんじゃないかなというのがあります。アクションプランの中にもありますけど、県の研修生受け入れ事業というのがあります。これは非常に手厚いところがあります。

しかし果たして、この（研修手当）１５万円の生活に慣れた者が就農できるかというと僕はそうは思いません。いいところ、僕は１０万円で。各々その家族構成に応じて受け入れ農家がそこに補充するべきじゃないかなと思います。

是非とも、この研修制度をもう少し人数を増やすため、または質を高めるために、当クラブと先輩農家さんも含めて、もっと発展させていただければ、１０年後の農業者が５年でできる可能性もありますし、スピーディな農業法人さんがありますので、是非そのへんを考えていただきたいと思います。

知事：　その１５万円ですが、２年位前までは１０万円だったんです。１０万円だった時は１０万円だった時で、「対話と実行」座談会で言われたのが、「１０万円で暮らしていけると思っているのか」と。「それでビビッて、そもそも就農しないんじゃないか」と言われたのもありました。ただ、他方で、おっしゃるとおりで、安住してしまうことになってはいけないのは確かだとは思うんです。で、バランスとって１５万というところに落ち着いたという経緯があります。

１５万を１０万にして厳しくしたら、より一生懸命やるんじゃないか、ハングリー精神を発揮してくれるんじゃないか、という道をとるのか、踏み出すリスクがある程度低くあったほうが、たくさん入って来ようとしてくれるか、そこのところは見方の違いだとは思いますが、とりあえずこの１５万円になって、実際使っていただいて

いる方が増えていますので、こちらでよろしいんじゃないかと思います。

また、人数が増えたら増えた分、予算を拡充していきます。さっき申し上げたように、一番大事なところで、こういうところは県としてお金を使うべきところだと思っています。高知県にとっては農業の担い手を確保するということが、強みを１０年後も維持していくために非常に重要なことです。

ただ、もう１つおっしゃった、単に研修をして独立をしたとしても、そのまま就業ということに結びつかない、仕事の仕方が分かっていないから、もっと言えば、販路とかそういうものも含めたノウハウも継承してあげないと、本当の就業には結びついていかないのだという点については、おっしゃるとおりと思います。

そこで、コウチ・アグリマネジメント・クラブでの後継者、人材の育成。クラブの皆さん方とタイアップすれば、もっとうまくできるんじゃないかということを言っていただいたと思いますけど、それは我々にとって願ったり叶ったりの話ですので、是非、一緒に対応させていただいて、もっと良いやり方というか、もっと言えば、お金の問題というより育て方といいますか、ノウハウというか、皆様方が先生だったら、それは本当に心強いので、是非一緒に対応させていただきたい。もし、今日を契機として、実務的にいろいろ協議させていただけるのであれば、是非お願い申し上げたいと思います。

それから、受入農家さんの５万円の件ですけど、前は、本当に年間１０何人だったので、ボランティアで受け入れてもらっていたんです。だけど、１１０人の就業者だと高知県農業の就業人口は減っていくので、１５０人から１６０人、１７０人、もっと言えば２００人確保できれば、キープできる。

すると、かなり無理してお願いして、受け入れてもらって教えてもらうということをやってもらわなきゃならなくなります。そうなると、従来のようなボランティアではいけないので、経費が増嵩する部分もあるでしょうから、その分、少し手当をお支払いするので引き受けていただけませんか、とお願いに回るということを想定しています。

もう１つ、人材不足についてですが、農業大学校に行った時、学生と話をしていると、「うちは農家じゃないので、農業はできませんから市場に就職します。」という子が結構いるんです。実に残念なことに。ミスマッチが起きているんだろうな、マッチングがうまくできてないんだろうなと思うんです。

だから、さっきおっしゃった、育てていただくとかそういうような仕組みとうまくいけば、皆様のところに、高知県の中でも割と士気の高い若い人達が入っていける、若い人達も農業をやりたい人間が農業をできるようになる、そういうふうなことになるのかもしれないと思います。

会長：　今日は、「対話と実行」ということで、県が主催ですが、是非とも時間がある時は、

当クラブの主催の時に知事に来て頂いて、もっとざっくばらんに話ができればと思います。

知事：　分かりました。よろしくお願いします。